

妊娠期からの親子の愛着形成と虐待予防のための家庭訪問

久保田君枝¹⁾、三輪与志子¹⁾、北堀昌代²⁾、疋田百合香³⁾

1) 聖隷クリストファー大学、2) 聖隷三方原病院、3) 遠州病院

背景

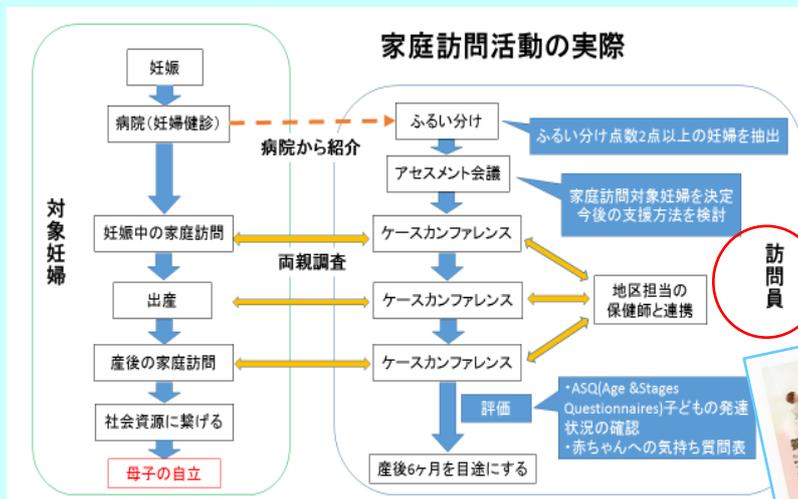
児童相談所における児童虐待相談対応件数(全国)



児童虐待相談件数は、年々増加している。子育て環境が変化している中、周りに頼れる人もなく、孤立感や負担感を抱え、子育てに自信が持てない親が多くなっている。子ども虐待死亡事例の4割が0歳児であり、しかも、0歳児の死亡事例の中で、生後0日目で亡くなる児が、4分の1もいる。そのような状況から、子どもが生まれてからのフォローでは、間に合わない。

そこで、妊娠期からの家庭訪問を始めた。HFH(Healthy Family Hamamatsu ヘルシーファミリーはままつ以下 HFH)を結成し、2013年から活動をしている。親と子の愛着が形成されやすい妊娠期や、出産直後からの家庭訪問を行い、親子の愛着を深め、親が自立し、地域の中で安心して子育てができるように、支援を行い虐待を予防する。

家庭訪問活動の実際



*この研究は、A大学倫理委員会(承認番号25-162)の承認を得ている。また、調査協力施設には、倫理審査委員会の承認を得た。

家庭訪問員養成講座

1)本講座は、Healthy Family America ヘルシー・ファミリー・アメリカ(HFA)のプログラムに学び、妊娠出産直後から、定期的な家庭訪問を行う家庭訪問員を養成する。
2)保護者にそっと寄り添い、親と子の愛着の絆を育んでいくことができる援助方法を習得する。

対象者: 看護師、助産師、保健師、保育士、教育関係者、児童民生委員、支援者、バイリンガルの方

基礎講座 (全10回講座) → スキルアップ講座 (全6回講座)

* 家庭訪問員および同行通訳員は、基礎講座を全講座受講しなければ、訪問を行うことはできない。

家庭訪問事例

1. 母親は10歳代、未婚の若年初産婦、中2より不登校。パートナーは20歳代、無職。望んだ妊娠ではなく、母親の両親も堕胎を希望していたが、時期を逸したため出産を自己決定する。自分たちで児を育てられる様に支援する。
2. 母親は10歳代若年妊婦でシングルマザー。実の両親の協力が得られにくい。妊娠8ヶ月から訪問開始。本人の出産と子育てを自分で頑張るという気持ちで支えた。
3. 40歳代の外国籍、日本語が話せないシングルマザー。健康保険未加入。経済的不安、子育て不安あり。出産前後に必要な準備の支援、生活保護の手続きに関する説明、保険なく受けられる支援の紹介を実施。

事例の背景からの問題点

- ・若年妊婦、予期せぬ妊娠、望まない妊娠、
- ・妊婦健康診査の未受診期間が長い
- ・不登校、高校中退、経済的に困窮、
- ・パートナーに父親意識が芽生えていない、無責任
- ・実の両親との親子関係が断絶している

家庭訪問行って

家庭訪問を通して、訪問員が親のモデルとなって、対象の長所を認め、褒めることで親意識が芽生え、児への世話をする行為の中に親としての自覚や喜びを感じている。その過程は、マザーの親役割獲得のプロセスと同様である。それは、親役割を模倣の段階から自分の子に合った育児、子どもが満足する方法を、育児経験を通して学習している。その過程が親子の絆を深め、親としての育児の楽しみや悩みの解決が自信に繋がっている。

更に、親の子育ての自信は、他の親子に関心をもち、関わりを求めることによって、地域の中での繋がりをもちながら子育てすることを求め、関わりの中での楽しさや、新しい発見として、子どもの成長や子育ての親の考え方の違いを知り、子育ては、自分の親子の関係の中でのやり方で良い、自分は自分でよいと認識しているステレオタイプの母親役割モデルにとらわれない親像がみえた。

継続的な家庭訪問員の養成や訪問のスキルアップできる研修等を行い、他職種の方々と連携・協働して活動を行っていきたい。